

科目名 Course Name		開講年次	開講学期	曜日・時限
フードコーディネーター演習 Food Coordinate Seminer		1年	前期	別途、時間割参照
単位数	授業の形態	授業の性格		履修上の制限
1単位	演習	選択	(フードスペシャリスト及びフードコーディネーター資格希望者は必修)	特になし
当該科目の理解を促すために受講しておくことが望まれる科目				
フードコーディネート論、フードスペシャリスト論、栄養学、調理学、食品学、商品開発、カフェ演習などの食関連分野				
同時に履修しておくことが望まれる科目				
フードコーディネート論、フードスペシャリスト論、栄養学、調理学、食品学、商品開発、カフェ演習などの食関連分野				
担当者に関する情報				
氏名	研究室の場所	オフィスアワー		電話番号・メールアドレス
牧田泰子	非常勤講師室	授業中に指示します		授業中に指示します
授業の概要				
食空間のコーディネートの方法についての基礎知識を習得し、その応用や実態を具体的な形で演習をすることで、実践力を学習する。又フードコーディネーターの多面的な実情を学び、食空間構成の実践力の習得を図る。				
授業の目標				
①食空間のデザインやテーブルコーディネートについて演習を踏まえて具体的に認識することができるようにする。 ②フードコーディネーターとしての仕事の概念を理解するとともに実践と理論の両面から行動する力を習得できるようにする。				
授業の方法				
テキストを中心とした講義方式と具体的な演習を組み込むことで実体験的な授業とする。フードコーディネーターとしての感性の大切さと知識や理論の大切さを”食”に関する時事問題を組み込み、視覚教材、プリントなどを活用しながら具体的に解説する。				
学習の成果(学習成果)				
①フードコーディネーターの仕事の概念としてとらえることができ、実際に解説することができる。 ②テーブルコーディネートを演出し、プレゼンテーション力を用いて効果的に演出することができる。				
授業のスケジュールと内容				
第1回目	ガイダンス、概要説明			
第2回目	第7章 食空間のあり方 小テスト(おいしさについて)			
第3回目	第9章 食空間とテーブルコーディネート(基本理論) 第11, 12回のテーブルコーディネート演習の説明			
第4回目	テーブルマナーとサービス①テーブルマナー(和食) コーディネートの実演			
第5回目	テーブルマナーとサービス②テーブルマナー(洋食) コーディネートの実演			
第6回目	テーブルマナーとサービス③テーブルマナー(中国料理) コーディネートの実演			

第7回目	テーブルマナーとサービス④テーブルマナー（中国・お菓子）コーディネートの実演	
第8回目	第10章 テーブルマナーとサービス③サービスマナー（和・洋）	
第9回目	テーブルマナーとサービス④サービスマナー（中国・お菓子）	
第10回目	テーブルマナーとサービス⑤プロトコル / 次回の演習のコンセプトシートの説明	
第11回目	テーブルコーディネート演習・発表1（個人のコンセプトに基づき、食器類を持参しテーブルコーディネートの発表）	
第12回目	テーブルコーディネート演習・発表2（個人のコンセプトに基づき、食器類を持参しテーブルコーディネートの発表）	
第13回目	第8章 食空間と内装デザイン-1（デザイン・コンセプト・プランニング）	
第14回目	食空間とテーブルコーディネート（厨房基礎知識）	
第15回目	補足授業及びまとめ	
事前・事後学習	演習に向けて事前に調べたり実際に店舗を見学して発表に備える。	
成績評価の方法と基準		
評価の領域	割合	評価の基準
授業参加態度	10%	授業に集中し、板書した内容だけでなく、重要だと判断したことに関しては主体的に調べ、ノートに書きとること、又演習への参加度を評価する。
レポート	20%	出題者の意図と合致した内容になっている。また詳細に課題を探究し、コンセプトも明確で内容、構成もしっかりしており、実際のコーディネートと合致している。
調査報告書		
小テスト		
試験	40%	資格試験に合わせたテストの実施
発表内容（態度含む）	30%	適切かつ正確な資料を駆使して自らのコンセプトを裏付けている。又実際に持参した食器類をコーディネートして視覚的にも有効に活用し、はきはきとわかりやすく発表している。
その他		
教科書と参考図書		
フードコーディネーター教本（日本フードコーディネーター協会）		
履修上の留意点・ルール		
●実務経験（職種；フードコーディネーター、職歴；通算25年） / 指導員の指示、指導を順守。授業の順番は変更することがある。毎日の生活の中で、食に関すること全てに関心を持ち、美的感覚やバランス感覚を養ってほしい。		